

「サンペイ・ベルジュンパ・ラギ」

かつおきんや作／永井吐無絵 リブリオ出版

近藤 伊津子

この稿にとりかかった時、私は少し苦笑した。たしか、昨年『カンポンのガキ大将』ラット・晶文社をこの欄に紹介したことを思い出したからである。あれこれ迷った末にこれに決めた時はそのことをすっかり忘れていたのだ。

この春、一週間、マレーシア国の天文学者一家がわが家に逗留した。彼女の夫と六才の息子の来日までの半年間は、幾たびも夕刻に

なると訪れ、夜遅くまで語っていく。マレーシアと日本の文化、ことに女と子どもに関する話は女同志の誼で尽きぬものであった。インド人の父とインドネシア人の母を持つ彼女は皮膚の色や黒く、彫りの深い顔立ちで大きな目をしており、インド人を思わせる。夫は先祖が中国の広東の出で、いわゆる華僑。息子は父親の皮膚と母親の顔立ちを受けつぎ、国籍不明に見える。ことばも、家族間、

親子では英語、彼女の母とはマレーシア語、夫のみ広東語ができるという。

このように、マレーシアはマレー人がやつと過半数、中国系がその二分の一、およびインド系……という多民族国家であり、一つの国の中のマレー人と中国人の対立は、宗教上（イスラム教と佛教）から経済問題と根深く、互に反目があるという。その中で自分達の結婚がいかに困難であったか……。彼女はイスラム教徒として育てられ、豚肉を食する中国人を汚いと教えられたという。しかし、この結婚は教育をうけることで、つまり学ぶことで、そのいまわしい偏見を捨てることが出来た一つの証であること。国内外の反目は教育の力でこそなくすことが出来ると、力をこめて静かに語った。

彼女のおかれた状況を知ることでもマレーシアという国を身近かに感じた。

しかし、マレーシアと日本との過去のかかわりについて、又、現在のマレーシア在住の日本人については決して語らなかった。英国人が未だにどんなに侮蔑的にふる舞っているかは語ったが……。

彼女一家が日本を出発したあと、そのことに気付いた。

大変前置きが長くなってしまい申し訳ないことであるが、この本を登場させるには、こういう背景のあったことを抜きにはできなかったのである。

物語は少女ミカの父親がマレーシアに単身で赴任するところから始まる。続いてミカの名古屋市内の公立中学校への入学、学校生活の一端が描かれているが、これもこの物語の重要なアプローチである。日本の現状を具現化されているのが公立中学校であるから。

父親の赴任地マレーシアのクアラ・ルンプールに出かけ、一週間をすごす。その間、少女は日本とマレーシアとの深いかわりを知り、マレーシア人にそれがどんな影響を及ぼしたのか、求める者にのみ与えられる糸をたぐり寄せながら旅が展開されていく。そして、かつて日本軍の日本人がしたことをかい間知り、マレーシアの傷を知る。

二度と戦争をしないことを、日本人の一人として誓い、平和を祈り、そしてこの国で中学生を送りたい、この国をもっと知りたい、人々と親しくなりたい、と思う。仕度のため一度帰国するところで物語は終わっている。

父親の住居の隣人のマレーシア人一家、マラッカでは、魚売りの女、古い教会の前で話しかけて来た「シレーブニ・イタ」老人、かつての興亜訓練所にいたリヨン先生、名古屋

で偶然見かけたことのあるカマリアさん……、ミカに接するマレーシア人は全てやさしく、どこまでもおだやかに微笑む。けれどもその皮膚の下には、決して癒されることなく傷がうずいていることも知る。

マラッカ海峡をのぞむ海岸で出会った中国系の青年。彼は祖父から聞かされてしっかりと憶えていることを話す。マラッカでの中国系マレー人の虐殺の様子を。

決して、そのことを忘れて微笑しているのではない。持ちまえのおだやかな国民性とあわせて、アジアの一員として親しみを込めていることをミカは知るのである。

そして、二度と、日本が戦争をしなかったらその時にこそ、日本のマレーシアにしたことを、この国の人々は許すのだと、この青年をして語らせる。

ミカの中学校生活、かつての軍事教練を思わせる場面が挿入されているが、マレーシアの人が望むように、ミカがマラッカ海峡で祈ったように、日本が「二度と戦争をしない」方向に歩んでいるのか、考えさせられるところである。

著者の後書き「取材ノート」にもあるがマレーシアの年輩者たちが、子どもどころ学校で習ったという「君が代」をうたってきかせたと。日本はマレーシアの子どもたちに「君が代」をうたわせ、日の丸をかかげさせ、日本語を教えていたと。しかし、この歌こそ、40数年前に、日本がつけた傷あとにはかならない。こんなふうに、子どもたちの心を侵略していたのである、と記している。

「日本人だけがあの戦争のことを忘れています。みなおぼえているのに」と。

○

重いテーマを少女の旅行として語りかけさせ、読む者に宿題を持たせる。

「はじめての海外旅行2」であり、1はフィリピン編、3はインドネシア編である。

やゝ、平坦に流れており、表現の深みに欠け、ものたりなさを感じさせるが、近隣のアジアの国を少しでも手元に引きよせてみるには良書であると思う。子どもたちのみならず大人たちも共に読み語りあう本である。

(かっこう文庫主宰)